

第 158 号

# Björk

ービョルク(白樺)ー



3月11日～12日にかけて旭川にて行われた第43回バーサーロペット・ジャパンのようす。新型コロナによる制限がほぼ解除され、2019年以来4年ぶりの開催となった今回は、パールエリック・ヘグベリ駐日スウェーデン大使も参加されました(関連記事8ページ)。

寄稿「子どもを中心とした野外での遊び」	.....	当別エコロジカルコミュニティー 山本 風音	2
寄稿「陶芸との出会い」	.....	山口ビクトル太平	6
寄稿「バーサーロペット・ジャパン これまでとこれから」	.....	公益財団法人 旭川市スポーツ協会 (バーサーロペット・ジャパン組織委員会) 館野 純	8
連載寄稿「ソフィア・ヤンベリの『スウェーデン便り』③」	.....	ソフィア・ヤンベリ	12
スウェーデンの企業紹介「Woolpower (ウールパワー)」	.....		14

一般財団法人スウェーデン交流センター (理事長 内野 貢)

〒061-3777 北海道石狩郡当別町スウェーデンヒルズ2329-25

<http://www.swedishcenter.or.jp/> e-mail: [info@swedishcenter.or.jp](mailto:info@swedishcenter.or.jp)

TEL 0133-26-2360 FAX 0133-26-2992

北海道当別町で活動をしている「当別エコロジカルコミュニティ（TEC）」という NPO 法人をご存知でしょうか？地域に根ざした環境教育に取り組むこの団体は、海外の環境教育を積極的に取り入れ、スウェーデンの教育についても積極的に紹介しています。近年は新型コロナによる影響で、各地で多くの団体が様々な活動が制限されていた中でも、様々な活動をおこない、スウェーデンとの結びつきを大事にされてきました。

今回はその TEC のこれまでの活動の数々を、スタッフの山本風音さんにご紹介いただきます。

寄稿

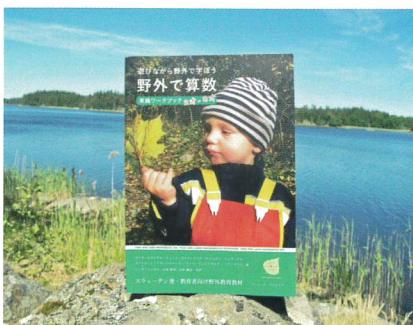
# 子どもを中心とした野外での遊び

山本 風音

(NPO 法人当別エコロジカルコミュニティ)

「勉強」と言うと学校の授業や、教科書やノートを使った学習を思い浮かべるかもしれません。しかし、子どもたち一人ひとりの「学び」という視点に立てば、学びは教室の中だけで起こっているわけではありません。子どもだけでなく大人であっても、わたしたちは日々の生活のあらゆる場面で多くのことを学んでいます。また、同じ年齢の子どもが同じ内容を一齐に学ぶ「学校」という仕組みが、産業革命以降にできた最近の制度であることを考えれば、それ以前の子どもたちは、身のまわりの環境の中で自主的に遊び、さまざまな物事を体験しながら、自分自身の暮らしの中で生活に根ざした学びを培っていたのかもしれない。

私たち当別エコロジカルコミュニティは、2018 年にスウェーデンの野外教育教材「野外で算数」を翻訳・出版して以来、「子どもの遊びと学び」をテーマに、さまざまな形でスウェーデンとの交流を行ってきました。コロナ禍が始まってからは、日本とスウェーデンを直接行き来することはできなくなりましたが、交流の場をオンラインに移し、現地の教育者や野外教育リーダーたちとの対話を続けています。ここでは、私たちが実施したオンラインイベントの一部を、その時に話し合った内容と共にレポートという形でご紹介します。「野外で算数」という活動を出発点に、野外で学ぶことの本質を見つめることは、子どもたち一人ひとりの視点に立って学びというものを捉え直していくこと、そしてスウェーデンの教育の基盤である、子どもの権利や民主主義の価値観を紐解いていくプロセスでもありました。これからの社会を形づくっていくために、子どもの学びや教育が果たすべき役割とは何なのか、イベントに集まった皆さんと一緒に話し合いました。



2018 年に翻訳した「野外で算数」

## 「教室を飛び出して野外で学ぶ」 というアイデア

野外教育は、学びの場を教室から野外の環境に移すことで、学びのスタイルを変えようとするアプローチです。教室を飛び出して野外に出かけ、身体を動かし五感を働かせながら、身のまわりの世界を自ら体験することで、子どもたちの主体的な学びへとつながっていきます。それは、知識伝達型の講義から、子ども一人ひとりを中心とした多様な学びへと、学びのあり方を変えていくことでもあります。

自然の中にいると、子どもたちは活発で協力的になり、発見の喜びというものが自然と沸き起ってきます。そのためには、子どもたちの「楽しい」や「やってみたい」という、より根源的な学びの意欲を出発点に、一人ひとりの異なる学びのスタイルに働きかけることが大切です。アメリカの心理学者であるハワード・ガードナーが発表した「マルチ知能理論」によれば、私たち人間の知能や能力には大きく 8 つの領域があり、言語的能力／論理的能力／視覚・空間的能力／身体・運動能力／対人的能力／自己内省的能力などのカテゴリーに分けられるとしています。また、個々人の得意な能力や、それに基づく得意な学びのスタイルは一人ひとり異なっており、そのため一人ひとりの主体的な学びを引き出すには、そうした個々の特性に応じた多様な学びのアプローチが必要となると唱えています。そういった意味では、学びの場を教室から野外の環境に移すことで、教科書を使った言語的または論理的な学びだけでなく、身体を動かし、感覚を働かせ、周りの空間を認識し、共に学び合い、ときには一人になって何かに没頭するといったように、子どもの特性に合わせた学びの選択肢を広げることができるのです。

野外でのさまざまな体験は、子どもたちが実感を伴った確かな学びを築くための重要な出発点になりますが、ただ体験をただけでは、そこでの活動は「楽しかった」で終わってしまいます。体験を学びにつなげるためには、

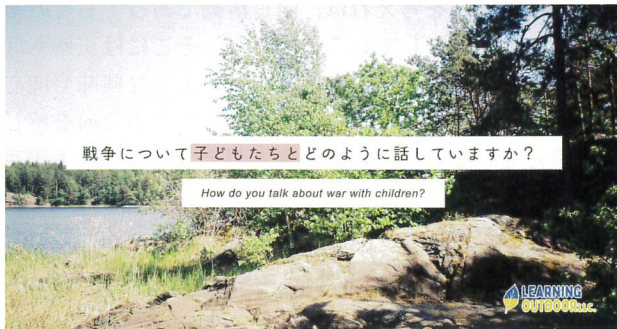
一人ひとりの知識や理解、これまでの経験や興味・関心と結びつけ、学びをサポートする周囲の大人が重要な役割を担います。教師や大人が、子どもの興味や好奇心を掻き立て、気づきや発見を促し、子どもの学びたいという気持ちを刺激しなければなりません。

スウェーデンの教育者たちは、子どもたちが何に興味を示し、何を体験し、何を感じ、どんなことを学んでいるのかについて、子どもの声にしっかりと耳を傾けることが大切だと言います。では、対話や話し合いによって子どもの声や表現を引き出し、そのような「子どもの視点」に立って学びを組み立てるにはどうすればいいのでしょうか。



## 「戦争について子どもたちとどのように話していますか？」

ゲスト：巽朝菜さん



2022年2月末に始まったロシアによるウクライナ侵攻を受けて、「戦争について子どもたちとどのように話していますか？」と題したオンラインイベントを実施しました。スウェーデンの野外就学前学校で保育士として勤務されている巽朝菜（たつみ あさな）さんをゲストに迎えたこのイベントでは、子どもたちとともに戦争という出来事をどのように受け止め、どのような話をしているのか、就学前学校における話し合いの様子についてお話を伺いました。その中で、わたしたちの世界で起きている悲惨な出来事に対して、子どもたちにどのように伝え、どのように向き合えばいいのか、オンラインイベントに集まった参加者の方々と一緒に考えました。

スウェーデンの学校庁（Skolverket）は、戦争が始まって一週間も経たないうちに、「戦争や危機について子どもたちとどのように話すか」というガイドラインをホームページに掲載しました。そこには、子どもの感情や不安を受け止めること、質問を投げかけて話し合いの場を設けることなど、いくつかのポイントが挙げられており、社会や周囲の世界で起きている深刻な状況について、大人と話したい（または話したくない）という子どものニーズに向き合うことの重要性を指摘しています。

今回のイベントでは、そうしたガイドラインを踏まえて、ゲストの巽朝菜さんが勤務されている就学前学校で実施した、戦争に関する話し合いの場面についてご紹介いただきました。その話し合いは、子ども一人ひとりの気持ちや感情について尋ね、それらの声に耳を傾けることから始まります。具体的には、4歳～5歳の子どもたちに対して、「ウクライナで起きている戦争について、誰かから何か聞いていますか？」と質問し、子どもたちはさまざまな感情を表した「感情カード」を使って、「怖い」「悲しい」などといった自分の気持ちを表していきます。さまざまな質問を通して、一人ひとりの感情に寄り添うこと、共感することや他の子どもを思いやる気持ちについて話し合うこと（「戦争をしている国の子どもたちはどんな気持ちだと思いますか？」）、自分は今安心できる場所にいること、その中で自分ができることや希望について話すなど、上記のガイドラインでも触れられているポイントに沿って対話が進められていきます。

スウェーデンの教育現場では、このような対話や話し合いといった場面が日常的に見られます。また、スウェーデンの就学前学校のカリキュラム（Lpfö18）では、子どもの権利や民主主義の価値観を実践していくための方法として、子どもたちどうしの対話や、自分の考えや感情を表現すること、一人ひとりが参加する権利や影響を与える権利などが重視されています。そうした日々の実践の中で、「一人ひとりとは違うけれど、みんな同じ価値を持っている」という認識を身につけていくのだと、巽さんは説明します。

自分の意見や感情を相手に伝える、相手の声に耳を傾けるといった日々の対話の実践は、それによって他者と関わり、身のまわりの社会や世界と関わっていくことでもあります。それは、戦争という悲惨な状況に向き合うようなときこそ、大きな意味を持つのではないのでしょうか。



## 「サステナブルな社会に向けた子どもの主体的な学び」

ゲスト：ライラ・グスタフソンさん



2023年3月には、スウェーデン南部・クリスチャンス

タッド大学の助教授であり、幼児教育と野外教育が専門のライラ・グスタフソンさんをゲストに招き、「子どもの主体的な学びとサステナビリティ」というテーマでお話いただきました。

気候変動や環境に対する意識、または人権やジェンダー平等、多様性などを含む包括的なサステナビリティの観点は、これからの社会を形づくっていく上での重要なテーマとなっています。その中で、持続可能な未来に向けて私たちの社会をより良く変えていくために、野外教育が果たすべき役割をどのように捉えたらいいのでしょうか。

スウェーデンの就学前学校のカリキュラムでは、「民主的な観点に基づき、自然、人、社会がどのように互いに影響し合っているのかについて、子どもの理解を育ていくことが重要である」と書かれています。そして、野外での活動を通してサステナビリティに取り組むためには、自然環境やエコロジーの視点を扱うだけでなく、経済と社会を含めた3つの視点を考慮する必要があるのだと、ライラさんは言います。

エコロジーの観点で見れば、野外でのさまざまな活動を通して、子どもたちは自然との関わりや理解を育み、自然に対する感性を育みます。環境に対する意識や責任感を高めるためには、小さいうちから自然に親しみ、ポジティブなつながりを築くことが重要です。それは、自分自身が自然の一部として感じられるようになること、そして、私たちは周囲の環境に影響を受け、同時に影響を与えていることに気づくことでもあります。

社会的な観点では、グループで互いに協力し、自分の考えやアイデアを表現し、他者の異なる視点や立場に気づくという点で、野外での学びは他者への理解や相手を尊重する気持ちを育むきっかけになります。加えて、自然環境が子どもたちに提供する遊びの場は、ジェンダーに関して中立であることが指摘されています。遊び方があらかじめ決められているような既成のおもちゃではなく、身のまわりの自然の素材が遊びの道具や学びの教材となるため、ジェンダーに捉われないより平等で多様な活動につながります。

経済的な観点で見れば、身のまわりの環境でさまざまな活動を行うことは、自分の生活に結びついた体験として、主体的に取り組む機会を与えてくれます。その中で、日常生活における自分の選択が、環境や社会にどのような影響を与えるのか、サステナビリティにいかに関与できるのかについて、意識を向けるように促すことが大切です。持続可能な未来を実現するためには、これら3つの視点を組み合わせ、野外の活動や教育の現場で実践していく必要があります。



そして、ライラさんが話の中で特に強調していたのは、まずは「子どもの視点に立つ」ということです。大人が一方的に知識や「正しい答え」を教えたり、子どもの学びや理解を規定してしまうのではなく、一人ひとりの声に耳を傾け、たとえ相手が小さい子であっても、一人の人間として接することが大切だとライラさんは言います。子どもたち一人ひとりが、捉え方の異なる多様な学びの主体であることを考えれば、同じ活動であってもそれぞれ異なる体験をしているのであり、そこには正解も間違いもありません。一人ひとりがどのような興味や関心を持ち、野外でどのような体験をし、その中で何を感じ何を学んでいるのか。教師や大人がそうした子どもの声に耳を傾けるなら、子どもたちは単に正しい答えを探そうとするのではなく、自分の学びに対して主体的に取り組み、影響力を持つことができるようになるでしょう。

野外教育や環境教育、体験学習などの理論や実践について議論する前に、まずは子どもの視点に立って学びを捉えることが大切です。そのような、子どもが中心であるという考えは、スウェーデンの教育の重要な出発点になっているのです。

## おわりに

スウェーデン発の「野外で算数」は、算数の成績を上げるための英才教育でも、特別な「学習メソッド」でもありません。それは、学びとは何か、教育とは何かを考える上で、「子どもを中心」としたアプローチの一つだと捉えることができます。しかし、野外教育や環境教育はときに、アクティビティとして「何をすべきか」ということに捕われたり、一方的な講義として自然科学の知識を伝えすぎたりして、子ども中心の学びの重要性が見失われていることもあります。今回、スウェーデンの教育現場で活動する方々との対話を通して見えてきたのは、まずは「子どもの視点」に立って一人ひとりの学びを捉えること、そしてその中で、スウェーデンの社会を形作る子どもの権利や民主主義の価値観が、教育現場におけるあらゆる活動の基盤になっているということです。

野外での遊びと学びは、子どもの発達にとって重要な

役割を果たします。特に幼児期におけるさまざまな体験は、生涯にわたる学びの基礎となるものです。小さい頃に自然の中で豊かな体験を培い、「学ぶことは楽しい」と思えるような感覚を育てていくことは、子どもたちが自分なりの方法で主体的に学び、身のまわりの環境や私たちを取り巻く社会と積極的に関わっていくことでもあります。私たちは、そのための方法の一つとして野外教育を捉え、これからも引き続き野外での遊びと学びについて取り組んでいきたいと思えます。



#### 寄稿者プロフィール

やまもと かざね  
**山本 風音**



札幌の大学で空間デザイン・コミュニティデザインについて学んだ後、フィンランドの北極圏で2ヶ月間のインターンシップを経験。

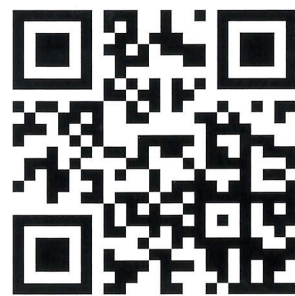
北欧の「学び」のスタイルや、自然と共にある暮らしの豊かさに感銘を受け、以来スウェーデンを始め北欧の自然学校や森のようちえんなど野外教育現場の視察、現地との交流プロジェクトに携わる。北欧の学びや自然との関わりをテーマに、野外をフィールドにした教育や場づくりを目指して活動中。

2018年、スウェーデンの野外教育教材「遊びながら野外で学ぼう 野外で算数(2才~8才)」を日本語に翻訳し、プログラムを紹介するワークショップを日本各地で開催中です。

スウェーデン交流センターのオンラインショップができました！

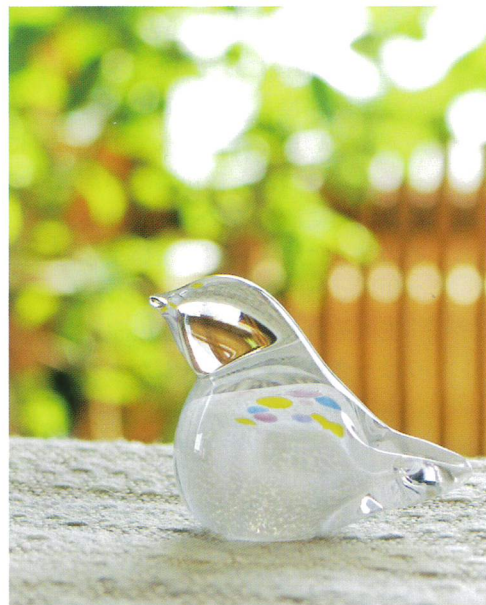
mycket  
ミュッケ

<https://mycket.stores.jp>



mycket オンラインショップ

スウェーデン交流センターでのお買い物が、PC・スマホからもお楽しみいただけるようになりました！「ミュッケ」オンラインショップでは、SCFガラス工房のガラス作品やスウェーデン直輸入の雑貨を多数掲載しています。新入荷の商品も続々追加していきます！オンラインショップ限定のサプライズイベントも企画していますので、ぜひチェックしてくださいね。



2021年5月から2年間、SCFスウェーデン人スタッフとして力を尽くして下さった山口ビクトル太平さん。現在はご自身がスウェーデンで学ばれていた陶芸の分野で日本とスウェーデンの架け橋となるべく研鑽を積んでいらっしゃいます。

今回はそのビクトル太平さんに、ご自身の陶芸との出会いや、日本とスウェーデン両国の陶芸の良さについて語っていただきました。

寄稿

# 陶芸との出会い

山口ビクトル太平



スウェーデンで2018年に行われた穴窯講座に参加した時の写真。窯の温度を上げるために薪を投入中です。

陶芸に興味を持ったのは小学生の頃、父の知り合いの陶芸家さんのお家に遊びに行ったのが陶芸との初めての出会いでした。山奥の森に囲まれて、ギャラリーと住居が一緒になった木造平屋建ての工房が建っていました。家の家具、食器、椅子、机、窯、何もかもを自分で作って生活をされている方で、都会育ちの自分にとっては、自由さと自然と共に生活しているその生き方が子供ながらに深く印象に残りました。

今から数年前の真夏、ちょうどスウェーデンの工芸美術大学を卒業して、2年が過ぎようとしていた頃でした。妹と弟と一緒に日本に遊びに行くことになり、みんなで初めて京都に足を運ぶことになりました。

スウェーデンの夏とは正反対の蒸せかえるような京都の夏。猛烈な日差しを浴びながらも、世界遺産や歴史的な重要建造物がたくさん建つ京都のどこを見ていいか、大いに迷いながら数日間歩き回りました。そんな中、清水寺辺りには陶芸のお店が数多くあるということを知り、お寺を見に行く途中にいくつか陶芸店に立ち寄ることができればと思い向かったのですが、店が多すぎて、なかなかお寺にたどり着けなかったのをよく覚えています。スウェーデンではこんなに陶芸店が1つの場所に沢山集まっているところはないと思います。

「これで最後にしないと！」と思い、のれんをくぐって入った陶芸屋さん。お店の中には、色々な種類の陶磁器が並んでいました。入ってすぐに目に入ったのは、棚の一番上にぼつんと置かれていた黄緑の花器。形はシンプル、自然に流れるマットな釉薬。金色にきらきらと輝くその輝きに見入ってしまいました。これが京都の陶芸との初めての出会いになりました。

正直それまでは、京都の陶芸がどんなものなのかあまりはっきりとしたイメージがありませんでした。日本の陶

芸として自分の頭に浮かぶのは、備前焼や瀬戸焼などの様なそれぞれ独特な風貌がある物。それならば「京都の焼き物は、繊細な絵付けがされた物かな？」と、そんな曖昧なイメージしかありませんでした。なのでさっきの黄緑の花器が目に入ったときは、これも京都の焼き物のひとつなのかと驚いてしまいました。実際に京都の陶芸屋さん足を運んでみると、とても幅広い表現の陶磁器が並んでいます。



京都にある一軒の陶芸屋さん。

京都の焼き物は、作り手の数ほど種類があるといわれているそうです。どうしてこんなにバリエーションが豊富なのか気になったので、よくよく調べてみると、まず京都の焼き物には備前焼などのように決まった技法がないそうです。お茶の文化の普及とともに焼き物の生産が盛んになった京都には、全国各地から沢山の職人さんたちが集まって、それぞれ多彩な技術で腕を振るい作品を制作してきました。いろいろな産地の良さが積み重なって、今現在の京都の焼き物へと成り立っているそうなんです。窯によって特色が違い、数多くの技法で焼き物が焼かれています。作風は変わりますが、個人や窯によって変わる技法など、作品のバリエーションの豊かさは、モダンなスウェーデンの陶芸ともどこか似ているところがあるかなと思います。京都の焼き物は伝統的でもあり、でもどこか現代的でもあるんだなと感じました。



日本ほど多くはありませんが、スウェーデンにも歴史が長い陶磁器メーカーがいくつかあります。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、いくつか紹介したいと思います。代表的な所としてはグスタフスベリイ (Gustavsberg) やロールストランド (Rörstrand)、そしてホーガネース (Höganäs) が挙げられるのではないのかなと思います。グスタフスベリイとロールストランドは主に磁器の生産で有名ですが、ホーガネースは陶器の生産で有名です。スウェーデンデザインとして知られるアイコン的な磁器やオブジェ、そして日用品を数多く作り出してきました。

その中でもロールストランドはヨーロッパで2番目に古い磁器メーカーで、1726年ストックホルムにあるロールストランド城で開始された磁器食器の製作が始まりなのだそう。時代を象徴する数多くのデザインを残してきました。代表的な物としては、沈没した船から発見されたお皿の破片をもとにデザインされた「Ostindia・オストインディア」や青い花の模様が可愛い「Mon Amie・モナミー」などが挙げられます。



青い花柄が可愛いデザインのロールストランドのモナミー。  
1952年の写真を送ってくれたお友達のおばあちゃんが、購入した物なんだそうです。

グスタフスベリイは1825年から磁器の生産を始め、現在ではクオリティーを重視し小規模なデザイン食器やオブジェの生産そして販売をしています。代表的な作品としてはスティグ・リンドベリイ (Stig Lindberg) がデザインした「Berså・ベソー」や「Adam・アダム」と「Eva・エヴァ」や日本でも根強い人気がある、陶芸家リーサ・ラーションさんがデザインした、愛嬌がある動物のオブジェなどが挙げられます。

最後のホーガネースは陶器の生産で有名なメーカーです。スウェーデンの南部のスコーネ県に位置する工場では、今でも昔と同じ技法で製作が続けられています。もともと1820年代にレンガ工場として建てられたのが始まりです。初めはレンガや工業用の陶器のパイプなどを主に生産していましたが、1830年代には日用品の陶器の製造が徐々に始まります。ホーガネースの陶器の特徴の一つとしてはその釉薬です。食塩釉という塩を使った釉薬を使います。鉄分をたくさん含んだ粘土と塩が反応を起こし、独特の深い黒茶色の表面をつくります。スウェーデンでは高温で焼ける粘土は南部の一部地域でしか採ることができません。スウェーデン南部にはホーガネース以外にもいくつか陶器工場が存在し、今でも手作りの日用品を制作しています。

話を日本に戻しましょう。さっき少しお話をした数年前に訪れた京都で、実は春から陶芸の勉強をすることになり、今この文書を書きながら期待で胸を膨らませているところです。日本の長い陶芸の歴史と伝統文化に、どっぷり浸かれるという事がとても楽しみです。日本の陶芸に惹かれる部分はいくつもありますが個人的に一つ選んでと言われたら、オーソドックスかもしれませんが、やっぱり伝統的な美意識が生み出す作風や表現だと思います。形がぐにゃっと傾いた茶碗や花器など、スウェーデンでは一般的には「未完成」としてとらえられるであろう陶磁器たち。まるで途中で轆轤を止めてしまったような風貌。そこに美しさを感じられるところは、僕の日本の文化の好きなところの一つです。

最近「茶の本」という、1906年に欧米向けに書かれた本を紹介してもらいました。この本を読んでいると、日本の独特な美意識と茶道の奥深さに心惹かれてしまいます。本の著者である岡倉天心は、茶道の美について「完全そのものよりも、完全を求める過程に重点を置いた。真の美は不完全なものを精神的に完成した人によって発見されるとした」また、「一種の虚が観察者を誘い、その美的情緒を十二分に満たせとばかりに待っている」と本の一節で語っていて、自分に特に印象を残した部分です。作品をあえて「不完全」にすることによって、鑑賞者に想像するスペースを与えて、そしてそこに膨らんだイメージが作品を完成させる。作品本体にはなく作品と人の間、目には見えない精神の中に完成品が生まれる。解釈に正解や不正解がない詩のような、自由で温かさを感じられる作品の鑑賞の仕方だなと読んでいて思いました。そして日本には日用品を一つの芸術作品として鑑賞する文化が、昔からあるという事に感心してしまいました。

日本の伝統的な美には西洋にはない感覚が沢山あります。これからの京都での陶芸の勉強そして生活、いろいろな文化に触れていいところをたくさん吸収できればと思っています。小学生の頃、森で出会った陶芸家さんのような自由な生活と作品制作を目指して、とにかく楽しんで自分なりにこの道を満喫しながらこれからの陶芸の勉強に励んで行きたいと思っています。

## Author ... 山口ビクトル太平

Yamaguchi Viktor Taihei



スウェーデン人の父と日本人の母をもち、中学生まで日本で過ごす。2004年に日本からスウェーデンへ移住し、Högskolan för Design och Konsthantverk (デザイン工芸美術大学)にて陶芸を学ぶ。2019~2020年にMedborgarskolan (市民学校) 陶芸コースのインストラクターとして勤務したのち2023年3月まで一般財団法人スウェーデン交流センターに勤務。現在、京都にて京焼・清水焼を勉強中。

毎年3月に、旭川でおこなわれているクロスカントリースキー大会「バーサーロペット・ジャパン」は、その名の由来がスウェーデンの歴史上のできごとになんだものであり、スウェーデンとの交流の架け橋として40年以上にわたって続けられてきました。

今回はそのバーサーロペット・ジャパン組織委員会の事務局としてご尽力されている、公益財団法人旭川市スポーツ協会の館野純様に、バーサーロペット・ジャパンのこれまでのあゆみと今後の展望についてご寄稿いただきました。

寄稿

# バーサーロペット・ジャパン これまでとこれから



公益財団法人 旭川市スポーツ協会

館野 純



## はじめに

雪国北海道の中でも有数の積雪寒冷地である旭川で1981年から続く「バーサーロペット・ジャパン」は、長年多くのスキーヤーに親しまれる本市の冬季スポーツの祭典です。

本大会は、スポーツの枠を超えて“雪”という特有の地域資源を活用した旭川の文化として、これからも発展し続けることを目指します。

今回は、本大会の特徴やこれまでの歩み、また、新型コロナウイルス感染症の影響により4年ぶりの開催となった第43回大会の様子をお知らせします。

## バーサーロペットのいわれ

1521年、当時デンマーク領だったスウェーデンの若き貴族のグスタフ・バーサー(Gustav Vasa)は、独立を目指し、ダーラナ地方のモーラ村(Mora)に行き協力を求めましたが、デンマーク兵に追われ、ノルウェーとの国境に近いサーレン(Sälén)まで一本ストックのスキー



グスタフ・バーサー王(肖像)

で87kmもの雪原を逃れたと伝えられています。

後にダーラナ地方の人々の協力を得てスウェーデンの独立を勝ち得たのですが、このことを祈念して、スウェーデンでは1922年からクロスカントリースキー大会「バーサーロペット」を開催しています。

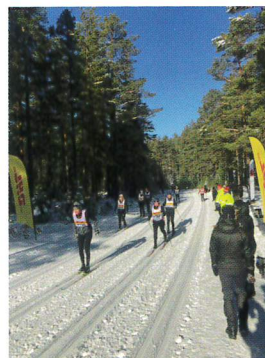


Foto: Eva Nelson

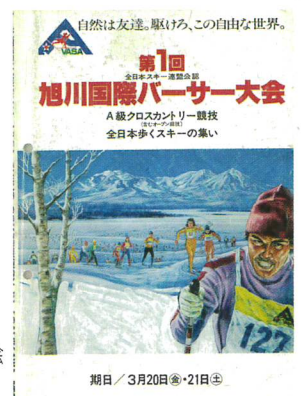


Foto: Anneli Andersson

2023年にスウェーデンで開催されたバーサーロペットのようす。

『伝統あるバーサーロペットのような大会を旭川でも開催できないものだろうか』との思いから、1981年3月に「第1回旭川国際バーサー大会」が誕生し、1,800人という多くの方にご参加いただきました。

第1回 旭川国際バーサー大会  
プログラム表紙



期日/3月20日(金)・21日(土)



# これまでの主なあゆみ

本大会は、1981年3月に市内の郊外にある旭川競馬場を会場に第1回大会を開催して以降、時代とともに変化しながら40有余年の歴史を築いています。

1986年の第6回大会では、過去最多となる13,252人のご参加をいただき、また、第10回大会では、スウェーデンからカール16世グスタフ国王のご臨席を賜るなど、国内最大規模の国際スキー大会として成長してきました。



第10回大会開催時 カール16世グスタフ国王陛下ご臨席時のようす

節目となる第30回大会からは、それまで親しまれてきた「旭川競馬場」から「富沢クロスカントリースキー場」に会場を変更し開催してきましたが、第32回大会から、クロスカントリーは富沢会場で、また歩くスキーは市内中心部に位置する北彩都会場と2会場で開催するようになりました。

第40回大会から北彩都に会場を一元化して開催する計画でしたが、新型コロナウイルスの影響により直前で中止となり、このたび4年ぶりとなる第43回大会で、初めて会場を北彩都に一元化して開催しています。

## バーサーロペット・ジャパン 主なできごと

1981年(第1回)

旭川国際バーサー大会 開催

1982年(第2回)

国際スキー連盟と全日本スキー連盟から大会の認可を受ける

1984年(第4回)

参加者が1万人を突破

1986年(第6回)

大会名称を「旭川国際バーサー大会」から、「旭川国際バーサースキー大会」に変更。参加者が過去最多の13,252人を記録

1990年(第10回)

スウェーデンからカール16世グスタフ国王陛下のご臨席を賜る

1991年(第11回)

雪不足のため初めて大会中止

2003年(第23回)

大会名称を「バーサーロペット・ジャパン」に変更

2010年(第30回)

会場をこれまでの「旭川競馬場」から「富沢クロスカントリースキー場」に変更

2012年(第32回)

富沢と北彩都で2会場開催

2020年(第40回)

新型コロナウイルスの影響で以降3年間中止に

2023年(第43回)

会場・コースを北彩都に一元化して開催

## 各会場での記録

### 旭川競馬場



### 富沢クロスカントリースキー場





## 北彩都



## 大会の特徴

冬の自然との一体感を身近に感じながら、雪原を自由に滑走するクロスカントリースキーは、雪国ならではのスポーツです。

毎年3月に2日間にわたって開催される本大会では、記録を狙うアスリートによる本格的なレースと、各自のペースでスキーを楽しむことが出来る歩くスキー・ミニロケットの種目があります。市内中心部の「北彩都」を会場に、川と橋のまち旭川らしい自然豊かな河川敷を滑走する、自然と都市が調和したスキーコースです。

旭川駅からコースが望める全国的にも珍しいレイアウトで、雄大な大雪山連峰を眺めながらスキーを通して春の訪れを感じる旭川の冬を満喫いただけます。



クロスカントリースキー コース図 (51km、17km、6.8kmの3種類があります)



歩くスキー コース図 (11kmと4.5kmの2種類があります)

## 第43回大会について

新型コロナウイルスの影響により4年ぶりの開催となった今大会は、2日間で1,276名の申込をいただき、天候にも恵まれ無事に終了しています。また、スウェーデン大使館からペールエリック・ヘーグベリ大使をはじめ、大使館職員やその関係者の皆様にもご参加をいただき、国際交流を深めています。

コロナ禍以前より参加人数が少なくなりましたが、会場では、大会を待ち望まれていた多くのスキーヤーの笑顔が溢れ、旭川の冬季スポーツのフィナーレを飾るに相応しい祭典となりました。



2023年3月に開催した第43回大会のようす。ペールエリック・ヘーグベリ駐日スウェーデン大使とともに、ズィグマルス・ズィルガルヴィス駐日ラトビア大使もご参加されました。



# バーサーロペット・ジャパンの 今後について

バーサーロペット・ジャパンは、旭川の冬季スポーツの中でも、40 有余年の歴史ある大会です。

本大会が、多くの市民にとってスキーに親しみかけとなるよう冬の旭川の魅力を発信し、雪国ならではのスポーツ・文化として、将来に繋げていくことで多くの市民やスキーヤーに愛される大会を目指していきます。



2023 年の第 43 回大会のようす。第 1 日目のスタート (左) と第 2 日目のスタート空撮 (右上)、コース全景 (右下)



誰もが気軽に音楽が楽しめるように…そんな想いのもと生まれた  
スウェーデンの楽器「ブネ楽器」、みんなで演奏してみませんか？

## スウェーデン交流センター ブネサークル

スウェーデン交流センター センターホール2階にて (参加費無料)

2023 年度 前期 開催予定日

4/22 5/27 6/24 7/22 8/26 9/23

毎月第 4 土曜日  
14:00 ~ 15:00



発見力  
つながりをみつける力

【業務内容】  
美術・書道作品集・記念誌・町史・チラシ・ハガキ・  
パンフレット・自費出版・インターネット事業・  
各種イベント 他

NAKANISHI PRINTING CO., LTD.  
中西印刷株式会社

〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号  
TEL (011) 781-7501 FAX (011) 781-7516  
<http://www.nakanishi-printing.co.jp/>

ソフィア・ヤンベリの

## スウェーデン便り

Brevet från Sverige by Sofia Janberg

寄稿：ソフィア・ヤンベリ

Tredje 第3回

## スウェーデン、冬の楽しみ

皆さん、こんにちは！ソフィア・ヤンベリです。

2023 年も3月を迎えて、ここスウェーデンも少しずつ春らしくなっていくと良いな…と思っていたのですが、先日ヨーテボリからストックホルムへ帰ってきたら、まさかの吹雪でした…。でも、3月に雪がまだたくさんあることを喜ぶスウェーデン人は実は結構多いんです。それは、この頃スウェーデンでは「スポーツ休み」があるから。「スポーツ休み (Sportlov)」って言うのはこの時期学校で設けられている一週間の休みで、多くの家庭で両親が仕事を休暇を取って、家族みんなでスキー旅行などに行きます。そんなこともあって、3月のスキー場は家族連れでとても混み合います。

今日はそんなスウェーデンの冬の楽しみ方についていくつかご紹介します。

\* \* \* \* \*

## 街に残る人も

確かにこの時期スキー場に行く家族連れは多いのですが、もちろんスキーをしない家庭も多いです。例えば、自分が子供だったころは、いつもスポーツ休みにおばあちゃんとおじいちゃんの家遊びに行きました。4月に一週間のイースター休みもあることもあって、この時期は子供がゆっくりできる日が結構あります。社会人にこの休みはないんですが、多くの家族連れが旅行しているため、都会はいつもより空いていて、電車も混まない…いつもよりストレスが少ない気がします。



## セムラの日

この時期のスウェーデンはまだ寒くて日が短いこともあって暗いんですが、楽しいこともたくさんあります。たとえば、休日以外にはセムラの日（今年は2月12日でした）など、ワッフルの日などがありますね。

セムラ Semla はスウェーデンの伝統的なお菓子で、昔はとても高かった材料（砂糖、生クリーム、アーモンドペーストなど）を使います。少し甘いカーダモンのパンに、生クリームとアーモンドペースト。シンプルですが、とても美味しいです。

実は今働いている会社で、今年「ストックホルムの一番おいしいセムラを見つけるコンテスト」なんてイベントが行われたんです！まずストックホルムにある8つのカフェのセムラが候補に挙がって、その後2つのお店に候補が絞られました。そしてセムラの日にはファイナリ



リストとして残った2つのお店のセムラのうち、ひとつがストックホルムで一番おいしいセムラ「Bästa Semla 2023」として選ばれました！

興味のあるかたは、この優勝したカフェ「Ett Bageri」のセムラを食べにストックホルムに来てみてくださいね！

## ESC も外せません

皆さんは、「ESC(ユーロビジョン・ソング・コンテスト Eurovision Song Contest)」のことを聞いたことがありますか。ESCは、ヨーロッパの様々な国の参加する音楽の一大イベントです！国ごとにアーティストが出場して、ESCのために作った曲で参加します。観客も、審査員も投票して、ヨーロッパでは大人気です！最初のESCは1956年に行われ、世界中の一番長く続いているテレビ放送される音楽コンテストです（「世界最長寿のテレビ音楽コンペティション」としてギネスにも認定されています）。

参加できる国は、もともとはヨーロッパの国だけだったんですが、オーストラリアから視聴しているファンがとて多かったこともあって、近年はオーストラリアからも毎回参加するようになりました！

スウェーデンは、これまでに通算6回優勝したことがあって、その内のひとつがABBAによるもので、彼らは1974年に「Waterloo(邦題:恋のウォータールー)」を歌い、スウェーデン出身のアーティストとして初めて優勝しました。こういった背景もあってかスウェーデン人は結構ESCに熱心で、ESCのスウェーデン代表を選ぶために、スウェーデン国内のコンテスト「Melodifestivalen」がESCの前に開催されます！

今年のMelodifestivalenのファイナルが3月11日に予定されていて、この記事を書いている時点ではまだ結果が分からないです…。この2～3月はMelodifestivalenが毎週土曜日に行われていて、スウェーデンではこの話題で盛り上がります！様々なジャンルの音楽がノミネートされるので、聴く人それぞれが気に入る楽曲が出てくるはず。今回は2012年にESCで優勝したアーティストLoreenが今年また参加しているので、勝ってもびくりはしないです…。



こうやって、スウェーデンも冬の終わりが一日ずつ近づいてきます。今日のような吹雪もあれば、春の印も毎日増えていきます。例えば、今日、おじいちゃんの庭に、「Snödropp」 という、小さくてかわいい花が咲いているのを見ました。

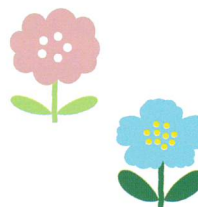


小さいころからこの花を見ると、春もあと少しでやってくるんだなと実感します。明るい時間も毎日伸びています。一番暗い時期には、ストックホルムでも3時ぐらいまでにはすっかり暗くなってしまおうんですが、最近は午後5時半までは明るくなりました。冬にも楽しいことがいっぱいありますが、それでもやっぱり暖かい夏が非常に楽しみに待ち遠しいですね。

### Author・・・ソフィア・ヤンベリ Sofia Jernberg



1993年ストックホルム生まれ。ストックホルム大学日本研究学科在学中の2013年に初来日。南山大学に留学後、帰国してストックホルム大学を卒業。2016～17年上智大学に留学。2018年～19年スウェーデン交流センター(北海道当別町)に勤務。現在、スウェーデンの特許法律事務所勤務。『ぼくが小さなプライド・パレード 北欧スウェーデンのLGBT+』の著者。



## 日本に進出しているスウェーデンの企業紹介

スウェーデンのブランド…と言ってみなさんが思い浮かぶものは何ですか？

有名なボルボ Volvo はもちろん、日本各地に店舗を構えるイケア IKEA、音楽配信ではスポティファイ Spotify など、みなさんご存知のブランドもあれば、スウェーデンのブランドと聞いて驚いたというものもあるかもしれませんね。

今回はスウェーデンの中部にある都市エステルズンド（Östersund）に拠点を置くウール（羊毛）ウェアのブランドで、質の高いウールウェアを世に送り出している Woolpower（ウールパワー）という企業をご紹介します。

# Woolpower®

ÖSTERSUND



## ウールパワーとは

ウールパワーとは、約 50 年前からスウェーデンのエステルズンドの自社工場で一貫した製造をし高品質なメリノウールウェアやアイテムを展開しているブランドです。100% ミュールシングフリーの羊毛を使用し、製造に関わるエネルギーも再生可能エネルギーを活用し環境配慮にも心がけています。また OEKO-TEX®STANDARD100 に認定された世界最高水準の品質です。



ウールパワーが生まれた背景は、1960 年代後半にスウェーデン国防軍の人たちが任務中に厳しい寒さで命を落とすことが多く、それを改善するために保温性のあるウェアを作ることが急務で開発されました。その時に生まれたのがウールパワーの独自素材「ウルフロッセ」と呼ばれるものでした。このウルフロッセという生地は、特殊な編み方で高密度に糸がループ状に連なっています。この独自の編み方により、タオルのようなふわとした触り心地で、更に肌に触れる部分がとても小さく、保温性を保つために重要な空気層を作れることで、保温性の高いウェアが誕生しました。

メリノウールウェアを展開しているブランドは数多く

あるのですが、ウールパワーは「あたたかさ」に重点を置いたブランドです。



一つはアパレル企業である限りウェアとしてのあたたかさの提供、もう一つは、環境や社会、ステークホルダーにとってもあたたかな会社であることを理念として

しています。環境配慮や使い捨てではなく高品質で長持ちする製品の展開、持続可能な社会を目指す姿勢は 1969 年の創業以来変わっていません。



## 厳冬でもあたたかに過ごす

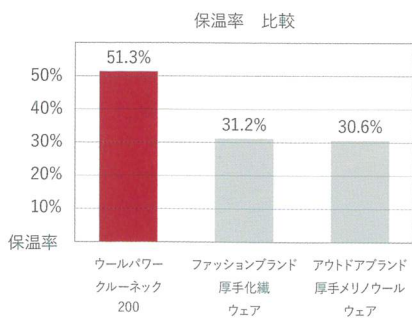
ウールパワーは「あたたかさ」に重点を置いたブランドですが、その独自素材「ウルフロッセ」が生み出す保温性に秘密があります。巷では多くの保温性ウェアがありますが、その保温性ウェアとは一線を画す作りになっています。例えば、最初はあたたかさを感じても汗をかいた時に肌にはりついてヒヤッとした経験はありません

か？多くは化学繊維の素材で、汗の吸収性や発散を得意としていなく、繊維に水分が染み付いたまま体に触れるので、汗冷えといった逆に体が冷えてしまう現象が起きてしまうのです。先に言及したように、独自生地ウルフロッチは密にループ状に連なりタオル地のようにになっているおかげで汗の吸収性がとても高いです。またウールの特徴である水分を外気に発散する力と速乾性を備えているので、肌に汗が触れずに汗冷えを防ぐことができます。このウルフロッチのおかげで保温に重要な空気層も維持できてあたたかさが持続するのです。

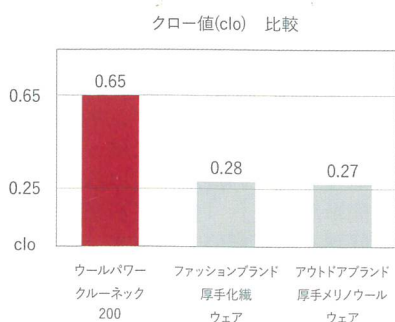


## 検査機関による ウールパワーのあたたかさの秘密

この独自生地ウルフロッチはどれだけの機能を発揮するのは、実際に着用してみないとわからない部分が多いのが事実です。そこで数値によるウールパワーの保温性の高さをご紹介します。



保温性試験(JIS L 1096保温性A法)／一般財団法人カケンテストセンター(2023年1月)  
JIS規格による、温湿度を同条件にし発熱体からの熱損失と発熱体に製品で覆った時の熱損失を測定し算出。



保温性試験(ASTM D 1518-85)／  
一般財団法人カケンテストセンター(2023年1月)

左下の表は、JIS 規格による保温性試験で、ファッションブランドの化学繊維素材の極厚インナー、他社アウトドアブランドの厚手メリノウールインナーとウールパワーのクルーネック 200 という厚手インナーの保温率と断熱率(clo 値)をそれぞれ比較したものです。

表の通りで、ウールパワーの保温率と断熱率が飛び抜けて高いことが判明しました。天然素材ウールの特性とウールパワー独自開発による技術の結晶です。北欧の厳しい寒さでもあたたかに過ごすためのまさに寒冷地仕様のメリノウールウェアと言ってもよいでしょう。

## Woolpower スタッフ Christian Stjärnered さ んより日本の皆さんに向けてのメッセージ



今回3月に日本に行き、日本の皆さんに Woolpower の魅力をお伝えする機会に恵まれました。四季の変化に富んだ日本にお住まいの皆さんは、その季節と天候に合わせた服装をお選びになり、またその服装も質の高い製品を使われることと思います。Woolpower の製品は機能と質の両面で高い価値をもっており、この2つが合わさることで、非常に高いレベルの快適な環境でアウトドア体験を日本の皆さんにも楽しんでいただけるものと思っております。

Woolpower は、持続可能性と高い耐久性が求められるメリノウールのアンダーウェア製品において、世界をリードするブランドとして知られています。1972年にエステルズンドで生産を始めた Woolpower は、12,000 m<sup>2</sup>の広さを持つ工場を新たに建設しました。2022年の夏に稼働を始め、来る4月20日にグランドオープン控えるこの新工場は、スウェーデンで最大の規模を誇る繊維工場で、将来に向けて大きなチャンスを生み出していきます。

ぜひ日本の皆さんも Woolpower の製品をお試しください！

Woolpower の製品は、各地にある国内外のアウトドア用品を扱う UPI ストアのほか、公式オンラインストアでも購入できます。興味のある方はスマートフォン / タブレットで右の QR コードからアクセスしてみてください。



気分は北欧生活。

スウェーデンヒルズ Since 1984  
Sweden Hills 

## 札幌郊外の丘に北欧の街並。 スウェーデンヒルズ。

大都市近郊でありながら自然に囲まれた美しい街並。  
「人が人らしく、自然と調和して豊かに暮らす」を理想に、  
スウェーデンの住環境を再現した住宅地として誕生以来30年。  
美しい風景の中で約300家族の暮らしが息づいています。

0120-242-522 [スウェーデンヒルズ](#)

スウェーデンヒルズウエスト地区レクサンド公園

### 賛助会員入会のお願い

一般財団法人スウェーデン交流センターは、ガラス作品や木工作品の制作などを通して多方面での交流を行うとともに、夏至祭、ロシア祭、各種展覧会など、年間を通して様々な催しを行い、スウェーデン文化の紹介を積極的に行なっています。

特に「世界一臭いスウェーデンの発酵にしん」スールストロミングの試食会を毎年開催し、多くの皆様からご好評を頂いております。

これらの催しは、当センターの趣旨にご賛同くださる皆様が賛助会員としてその運営基盤をささえてくださっており、毎回の催し等は、広報誌「ビョルク」にも掲載し、賛助会員の皆様には、年4回ご自宅まで郵送、いち早く情報提供しています。ぜひ賛助会員にご入会下さいませよう、お願いいたします。

賛助個人会員 年会費 ー□ 5,000円

賛助法人会員 年会費 ー□ 20,000円

### あとながき

●3月に旭川で開催された第43回「パーサーロペット・ジャパン」には、ヘーグベリ大使の他大使館スタッフの方も参加されていました。形だけの参加ではなく、大使館のスタッフの皆さんは滑りがとても上手で、やはり日常からスポーツに親しんでいるんだなと感心してしまいました。

●毎月第4土曜日に開催している「ブンネサークル」は、毎回お立ち寄りいただいた方に楽器に触ってもらうだけでなく、実際に演奏していただいているのですが、「思っていた以上に簡単だった」「気軽に音楽ができて楽しかった」など、ご好評をいただいています。楽器を演奏する、スウェーデンの音楽を感じられる機会として今後も続けていきますので、ぜひ参加してみてくださいね！